

幼児期の自己制御機能の発達(6) －保育の特徴と子どもの行動特徴－

森 下 正 康

(心理学教室)

A Developmental Study of Self-regulation in Preschool Children (6) －Influences of nursing on children's behavior pattern－

Masayasu MORISHITA

2002年10月11日受理

問 題

これまで、親子関係が家庭や幼稚園・保育園での子どもの自己制御等にどのような影響を与えるかについて検討してきた(森下、2000a, 2000b, 2001, 2002a, 2002b)。その中で、特に園での子どもの特徴について、母親や父親の態度要因だけでは十分に説明できない点があるということが明らかとなった。子どもの自己制御等の発達には、親子関係をはじめとする家庭での相互作用のほかに、園における先生(保育者)との相互作用や、園自体の特徴(例えば、教育(保育)方針の特徴)、家庭や園を取りまく地域の社会的文化的特徴などの複合的、生態学的な要因が作用しているものと考えられる(小嶋1999; Bronfenbrenner, 1979)。

本研究においては、園における先生(保育者)の保育の特徴に焦点を当て、それが子どもの自己制御等にどのような影響を与えているかについて検討する。各園の保育者は、その園の教育(保育)方針や伝統的文化の影響を受けていると考えられるので、園によって実際の保育の特徴が異なるものと予想される。そこで、ここでは各園の子どもの特徴を明らかにし、さらに各園の保育特徴を明らかにして、両者の関連について検討したい。

したがって、次のような検討課題を設定した。幼稚園(保育園)によって、子どもの自己制御等の様相に差異があるかどうか。あるとすれば、そこに保育者の保育特徴がどのような影響を与えているかに焦点を当てる。

生態学的な視点をいれると、対象となる園は幅広い地域から、しかも異なったバックグラウンドをもった園を抽出し比較検討する必要がある。それを組織的に行うには、それ自身が大きな労力と協力を得なければならない。幸いにしてこれまで研究に協力してくださった5つの園は広い

地域性をもっており、異なったバックグラウンドをもっていると考えられる。今回は、家族構成や家族関係、地域性や園のバックグラウンドには深入りしないで、まず園の保育特徴と子どもの特徴との関連に焦点を当てることにする。

上記のような課題に伴って次のようないくつかの課題が派生する。

各園における保育特徴が子どもの自己制御等の発達に影響を与えているという視点から研究する場合、まず園や家庭における子どもたちの特徴が安定したものかどうかを確かめる必要がある。もし仮に、その園における子どもの特徴自身が一過的なもので、時間や状況によって大きく変動するのであれば、課題の設定自身があやしくなる。そこで、半年の間をあけて2回の調査を行い、その間の関連を検討する。

園における子どもの特徴と家庭における子どもの特徴がどの程度一致しているか、それが特性によってまた園によって異なるかどうかを明らかにするのは興味深い。もしその点に差異があるとすれば、それには保育特徴や親子関係の要因が関係しているかどうかについて探ることは、子どもの自己制御の発達研究にとって意義深いことである。

保育特徴については、保育方針のような認知レベルではなくて、現実にはどのような保育をしているかに焦点を当てた。また同じ園において保育特徴が保育者間でどの程度一致するか、その一致度が園によって異なるかどうかによって、園の特徴の一端が浮き彫りになるだろう。

方 法

分析対象と手続き

基本的にはすでに発表した研究(森下、2002b)データの一部と、新しく保育特徴に関する調査結果について分析している。和歌山県下の4つの幼稚園(A、C、D、E園)と1つの保育園(B園)の年中児(4歳児)と年長児(5歳児)が研究の対象となった。各園児の担任に対して、一人一人の子どもの園でのようす(自己抑制、自己主張、養護性、攻撃性)について評定を求めた。また、ふだんの保育の特徴についても質問紙に回答を求めた。他方、子どもの母親と父親に対して家庭での子どものようすと、自分の養育態度(受容、統制、矛盾、実権)について評定を求めた。分析データ数の内訳を表1に示す。1回目の調査では、回収された担任評定(園)と母親評定(家庭)の内、記入漏れのないデータを分析した。2回目の調査では、園と家庭の両方のデータがそろったものについて分析した。また、親の養育態度については母親と父親の両方のデータがそろったものについて分析した。

対象となった幼稚園・保育園は、ふだんから研究熱心な園で、今回の研究にも積極的に参加してくださった。園の案内によれば、各園の教育(保育)目標の特徴は概略次の通りであった。

A園：和歌山市に隣接する、人口増加のみられる町にある幼稚園。まわりは田園風景が広がっている。園の教育目標は「生き生きとした強く明るい子ども、美しくあたたかい心の子ども、考

表1 分析対象となった5園のデータ数

園名	男子				女子				保育特徴 保育者
	1回目 園	2回目 家庭	2回目 園・家庭	養育態度 母・父	1回目 園	2回目 家庭	2回目 園・家庭	養育態度 母・父	
A	103	83	101	68	94	82	96	69	9
B	36	34	34	30	48	47	46	41	6
C	51	33	49	24	43	35	45	26	7
D	65	48	60	36	58	42	54	35	8
E	22	22	19	18	11	10	12	9	4
計	277	220	263	176	254	216	253	180	34

えやり抜こうとする子どもの育成」である。

B園：和歌山市の郊外にある保育園。乳児保育からはじめている。園の保育方針は、「強くたくましい子ども、みんなと遊べる子ども、生命を大切にする子ども、豊かで素直な感性をもった子どもの育成」であり、遊びを通して今を精一杯豊かに生きることを大切にしている。

C園：醤油発祥の地として有名な伝統のある町の中心部、お寺の境内にある幼稚園。「＜釈尊の御教えを幼なごに＞を教育の理念とし、子どもたちが心身ともにのびのびと育っていくことを願い目標とする。かがやく生命、やさしい心、豊かな個性の育成をめざす。」

D園：古い伝統のある町並みのなか、お寺の一角にある幼稚園。近くには有名な漁師町やミカン山が連なっている。「幼児期に宗教的な情操をあたえ生命を大切にし、明朗で感謝の心を忘れない、心も体も共に風雨に負けない立派な根をもつ幼児を育てる教育を目標にする」

E園：紀南地方の最大の都市にあるキリスト教会の小さな幼稚園。「教育のこころ；子ども一人ひとりの命を輝かそう。教育のねらい；輝く笑顔、たくましく生きる力、やさしい信条、仲間とともによく視る目、よく聴く耳、よく考える頭を育てる」

調査時期：1回目2000年7～8月。園と家庭における子どもの特徴と親の養育態度の測定。

2回目2001年1～2月。園と家庭における子どもの特徴と保育特徴の測定。

質問紙と尺度

子どもの特性（自己抑制・自己主張・攻撃性・養護性）と親の養育態度については先の研究（森下、2001）と同じ内容であった。担任による評定には自己抑制と自己主張に関しては4件法（0 ちがう・1 ややそうだ・2 かなりそうだ・3 非常にそうだ）、養護性と攻撃性に関しては5件法（0 ない・1 たまにある・2 ときどきある・3 よくある・4 非常によくある）が用いられた。母親による評定はすべて3件法（0 いいえ・1 ?・3 はい）であった。

保育特徴については、梶田ほか（1985）の作成した質問紙を用いた。この質問紙は51の対になった項目（6件法）からなっており、どちらの方の意見にどの程度賛成かについて評定を求めている。次のような4つの因子が抽出されている。「成果重視－過程重視」、「子ども中心－教師中心」、「まとめ重視－個性重視」「男女区別－男女平等」。

結 果

1. 5園の子どもの特徴

(1) 1回目の調査結果

男子の1回目調査データについて、園（担任評定）と家庭（母親評定）での特徴について園ごとに尺度得点の平均値と標準偏差（SD）を求め、分散分析を行った。その結果、図1に示すよ

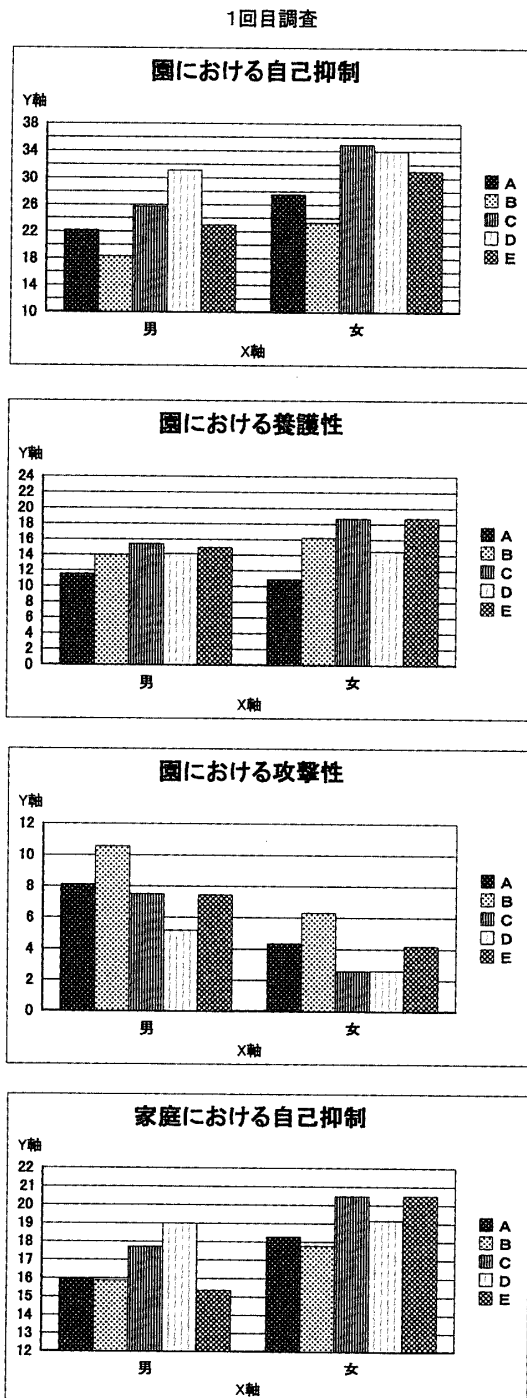


図1 各園の子どもの特徴（第1回目）

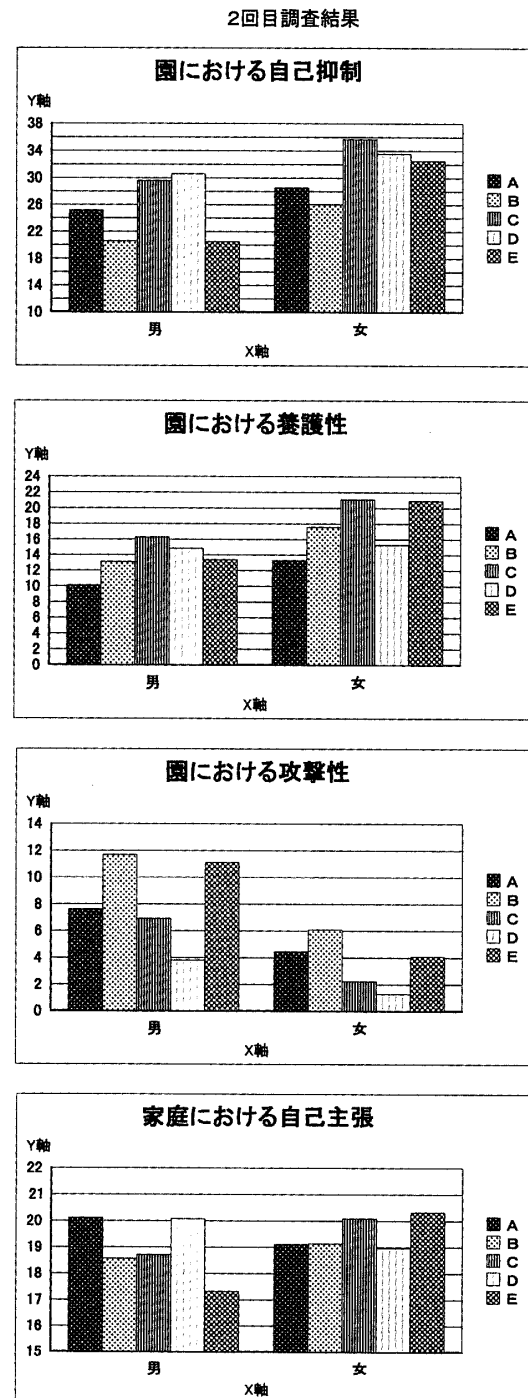


図2 各園の子どもの特徴（第2回目）

うに、有意差のみられたのは園における自己抑制、養護性、攻撃性、家庭における自己抑制であった。有意差のみられたものについてさらにTukeyの法により園間比較をした結果、次のことが明らかとなった。

1. 園における自己抑制が非常に高かったのはD園で、C園も高く、B園は低かった。
2. 園における養護性について、A園が低かった。
3. 園における攻撃性について、相対的にB園が高くD園が低かった。
4. 家庭における自己抑制について、D園が高く、A園は低かった。また、人数が少なくて有意差はなかったがB園とE園はD園よりも低かった。

女子の1回目調査データについて分散分析を行った結果、図1に示すように有意差のみられたのは園における自己抑制、養護性、攻撃性で、家庭においてはどの特性についても有意差はみられなかった。有意差のみられたものについてTukeyの法により園間比較をおこなった。

1. 園における自己抑制が高かったのはC, D, E園で比較的lowかったのはA園、かなりlowかったのはB園であった。
2. 園における養護性はC, E園は高く、B園も比較的高いのにに対してA園はlowかった。
3. 園における攻撃性については全体にlowい値であったが、B園が高くC, D園がlowかった。

(2) 2回目の調査結果

5園の男子の特徴について分散分析を行ったところ、図1に示すように有意差のみられたのは園における自己抑制、養護性、攻撃性、家庭における自己主張であった。有意差のみられたものについてさらにTukeyの法により園間比較を行った結果、次のことが明らかとなった。

1. 園における自己抑制について、D, C園は高くB, E園がlowかった。
2. 園における養護性について、C, D園は高く、A園はlowかった。
3. 園における攻撃性について、B, E園が高く、C園はlowくD園は非常にlowかった。
4. 家庭における自己主張は、A, D園は高く、E園はlowかった。

男子について、各園の子どものプロフィールを図3に示す。この図では1項目あたりの平均得点をもとにプロフィールを描いている。各園の子どもたちの特徴が浮き彫りとなった。

- ・ A園の男子は養護性がlowいのにに対して家庭での自己主張は高かった。
- ・ B園の男子は自己抑制がlowくて攻撃性が相対的に高かった。
- ・ C園の男子は園での自己抑制と養護性が高いのにに対して攻撃性がlowかった。
- ・ D園の男子は自己抑制と養護性が高いのにに対して攻撃性が非常にlowかったが、家庭での自己主張は高かった。
- ・ E園の男子は自己抑制がlowくて攻撃性が相対的に高く、家庭での自己主張がlowかった。

園におけるこのような特徴は1回目調査の結果をすべて反映しており、さらに新しい特徴が少し付け加わったものであった。

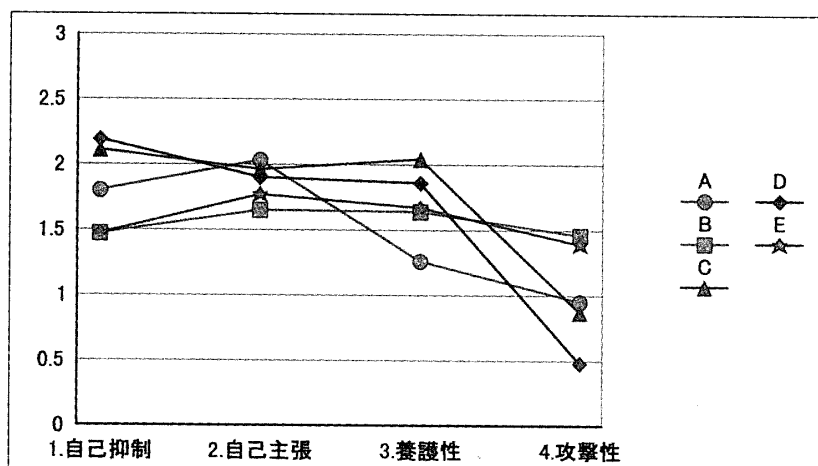


図3 各園の子どものプロフィール (男子)

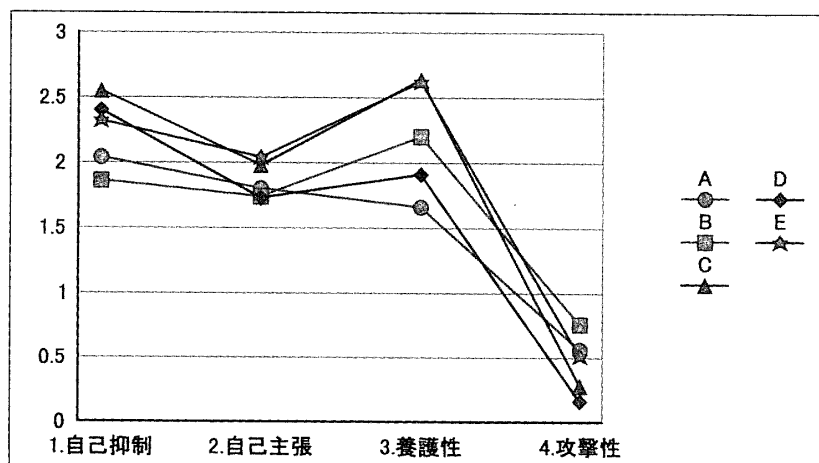


図4 各園の子どものプロフィール (女子)

女子について、図2に示されているように有意差のみれたのは園における自己抑制、養護性、攻撃性であった。家庭における特徴には有意差はみられなかった。有意差のみれたものについてさらにTukeyの法により園間比較をした結果、次のことが明らかとなった。

- 1 園における自己抑制は、C、D園は高く、B、A園は低かった。
- 2 園における養護性は、CとE園が高く、次いでB園が高く、A園が低かった。
- 3 園における攻撃性は全体に低かったが、相対的にB園が高くC、D園は非常に低かった。

以上の結果から女子について男子と同じように各園の特徴を図4に描くことができる。

- ・ A園の女子は自己抑制と養護性が低く、攻撃性がやや高かった。
- ・ B園の女子は自己抑制が低く、養護性は高くかつ相対的に攻撃性もやや高かった。
- ・ C園の女子は自己抑制と養護性が高く、攻撃性が非常に低かった。
- ・ D園の女子は自己抑制が高く、攻撃性が非常に低かった。
- ・ E園の女子は養護性が高かった。

以上の結果は一回目の調査結果とほとんど同じであった。

したがって、男子についても女子についても5園の子どもの園における特徴は、半年間を経てもあまり変化せず安定しているといえる。家庭での子どもの特徴は、女子については1回目調査も2回目調査も5園間に有意差がないという点で一致していた。また男子については1回目は自己抑制に関して、2回目は自己主張に関して園間に有意差があるという風に一致していなかった。

(3) 園と家庭での子どもの特徴の一致

園と家庭での子どもの特徴はどの程度一致するかについて、5つの園について比較検討した。園と家庭での子どもの特徴について、その相関係数を表2に示す。

園のちがいをこえて男女に共通していることは、養護性について相関が低く、園と家庭での子どもの特徴には関連がなかったことである。また攻撃性についても相関係数はあまり高い値ではなく、園と家庭での特徴は一致するとはいえなかった。つまり養護性や攻撃性は、どの園の子どもも比較的場面によってまた子どもによって多様な行動パターンを示すということが分かった。

男子に関して、1回目と2回目の調査結果が安定したものについてみると、A園は自己主張の程度について相関が高く、園において自己主張の高い子どもほど家庭でも自己主張が高かった。B園はいずれの特性についても相関が低く、園と家庭という場によって子どもはさまざまな行動パターンを示していた。C園は自己抑制に関して相関が高く、園で自己抑制の高い子どもほど家庭でも自己抑制が高かった。D園は自己抑制と自己主張について相関が高く、園で自己抑制や自己主張の高い子どもほど家庭でもそれが高かった。E園の場合は人数が少なく相関係数も不安定(1回目と2回目の結果が異なる)であった。

女子に関して、ほとんどの園は自己抑制と自己主張について相関が高く、園で自己抑制や自己主張が高い子どもほど家庭でもそれが高いといえた。ただし、E園のみはデータ数が少ないこともあってか、相関係数が不安定であった。

表2 園と家庭での子どもの特徴の一致(相関係数)

園(回)	人数	男				女				
		抑制	主張	養護	攻撃	人数	抑制	主張	養護	攻撃
A (1)	79	.205	.545**	.273*	.280*	79	.460**	.388**	-.075	.380**
(2)	101	.040	.394**	.232*	.250*	96	.384**	.339**	.165	.205*
B (1)	34	.312	.033	.159	.177	47	.449**	.361*	.185	.397**
(2)	34	.130	.265	.159	.135	46	.435**	.392**	.208	.192
C (1)	33	.593**	.136	.205	.445**	33	.399*	.420*	.277	-.006
(2)	49	.415**	.354*	.166	.277	45	.346*	.582**	.372	-.090
D (1)	45	.371*	.504**	.350*	.330*	40	.434**	.465**	.157	.137
(2)	60	.473**	.533**	.213	.337**	54	.398**	.463**	.128	.332*
E (1)	21	.521*	.683**	-.019	.350	9	.713*	.089	.273	.228
(2)	19	.268	.018	.217	.298	12	.423	.440	.378	.473
全体 (1)	194	.402**	.447**	.197*	.351**	194	.470**	.411**	.101	.330**
(2)	198	.274**	.367**	.109	.280**	198	.477**	.394**	.212**	.222**

* $p < 0.05$

** $p < 0.01$

以上のように、園によってその様相は異なっているが、自己抑制や自己主張の程度が園と家庭で類似しているということは、次のような二つの解釈が考えられる。一つの解釈は、園で育った自己抑制や自己主張の機能が場面を越えて家庭でも実現しているということ。他方の解釈は、家庭で育った自己抑制や自己主張の機能が、園でも表現されているということ。おそらく両方の可能性が考えられ、子どもの自己抑制や自己主張のバランスのとれた発達、つまり自己制御の発達にとって園と家庭の連携が重要となるだろう。

2. 5園における保育特徴

対象となった5園の先生34名と、幼稚園・保育園の主任クラス対象の研修会に参加した62名のデータについて分析した。

表3 保育方針に関する主成分分析 (α 係数、項目内容と負荷)

第1因子 数・言葉の指導重視 — 生活体験重視 $\alpha = 0.738$	
1 数の学習を積極的に進める	1 数の学習は子どもの自然な意欲にまかせる
2 文字や言葉の学習を積極的に進める	2 文字や言葉の学習は子どもの自然な意欲にまかせる
3 ワークブックやドリルを使って指導する	3 子どもの園における日常の生活体験を通して指導する
4 一人ひとりの子どものペースよりもクラスのまとまりを大切にする	4 クラスのまとまりよりも一人ひとりの子どものペースを大切にする
5 食事やおやつではクラスが同じペースで残さず、きちんと食べるように指導する	5 食事やおやつでは一人ひとりの子どもの好みやペースを大切に指導する
6 所属する園や研究団体の考え方、見方に合わせて指導する	6 保育についての自分の見方、感じ方、考え方にそって指導する
7 音感や情感よりも、言葉や数が分かるように指導する。	7 言葉や数よりも音感や情感を育てるように指導する
第2因子 安全・過程重視 — 冒険・成果重視 $\alpha = 0.653$	
8 子どもの環境（例、遊具遊び場など）は安全を中心に設定する。	8 危険を恐れず子どもには魅力的で、冒険のできる環境を設定する
9 ケガのないよう子どもの身体の安全を第一に指導する	9 ケガを恐れず子どもが積極的に活動するよう指導する
10 保育では最期の成果よりもよい経過をたどるように指導する	10 保育では経過はともかく最後にはよい成果を成就するように指導する
11 保育の発達の理論（例、モンテッソーリ、フレーベル）に従って指導する	11 あくまでも自分自身の経験を大切にして指導する
12 時と場合によって、柔軟に指導の計画を変える	12 いったん決めたら一貫して指導の計画を実行する
13 子どもの短所よりも、長所をより伸ばすように指導する	13 子どもの長所よりも、まず短所を克服するように指導する
14 日案や週案として指導の計画を立てる	14 指導の計画は、その流れを頭に描くにとどめる。

第3因子 子ども主導 — 教師主導 $\alpha = 0.632$	
15 失敗を経験させそれに耐えさせたり、恐れないように指導する	15 失敗は意欲をおとすので成功するように指導する
16 造形では、子どもの生み出す発想やイメージを第一に指導する	16 造形では、教師の意図した考え方やイメージを第一に指導する
17 園の行事や準備には、父母の参加を積極的に求める	17 園の行事の準備はすべて教師の力だけで行う
18 困難な時でも、子どもが最後までねばり強くやりとげるように静かに見守る	18 困難なときは、早く、うまくやりとげるように積極的に援助する
19 ケンカが起きたときは子どもに解決をまかせる	19 ケンカが起きた時は教師が直ちに入って解決する
20 年齢などの発達基準にもとづいて子どもを理解する	20 子ども同士を比べながら子どもを理解する
21 それぞれ子どもの家庭のしつけの仕方にあわせて指導する	21 家庭よりも園や教師の指導の方針にそってしつけをする
第4因子 協調性・重いやり重視 — 個性・たくましさ重視 $\alpha = 0.626$	
22 子どもには母親のように指導する	22 子どもには父親のように指導する
23 子どもが互いに仲良く、助け合うように指導する	23 子どもが自分の気持ちや要求を率直につらぬくように指導する
24 間違った行動を直すには、その理由を言葉で子どもにわかるまで説明する	24 間違った行動を直すには、言葉で説明するよりも、その場で直ちに叱る
25 鉄棒、マットなどの運動では、その活動に興味を持つよう指導する	25 鉄棒、マットなどの運動がうまくできるように指導する
26 教師も子どもの中に入って一緒に遊ぶ	26 子どもどうして遊ばせ、教師は見守るようにつとめる
27 思いやり、やさしさなどを身につけさせるように指導する	27 たくましさ、積極性などを身につけさせるように指導する
28 子どもには教師としていつも変わらぬ態度で指導する	28 教師もひとりの人間として、率直に自分の気持ちに従い指導する
第5因子 男女区別 — 男女平等 $\alpha = 0.609$	
29 運動、身のまわりのこと、ふだんの活動等では子どもの性別にあった指導をする	29 運動、身のまわりのこと、ふだんの活動等では子どもの性別にこだわらず指導する
30 男の子らしい遊び、女の子らしい遊びをさせるよう心がける	30 性別にこだわらずどんな遊びもさせるように心がける
31 男の子らしさ、女の子らしさを伸ばすように指導する	31 男の子も女の子も等しく指導する
32 子どもが独力でやりとげるように指導する	32 教師や友だちにきがねなく助力を求めるように指導する

計96名のデータについて、改めて保育特徴51項目の主成分分析を行った。固有値の変動に注目して因子数を決め、最終的に斜交6因子解が得られた。主成分分析に基づいて作成した尺度に関して尺度の信頼性を確認したところ、第6因子の α 係数(0.518)が特に低かったので削除することとした。各主成分(因子)に高く負荷する項目と尺度に関する α 係数を表3に示す。各因子に

高く負荷する項目内容から表に記すような命名を行い、それらの項目についてその素点の和を尺度得点とした。各5つの園とその他の園について尺度の平均値と標準偏差(SD)とを算出した(表4)。各尺度の平均値について1項目当たりの値をプロフィールに示したのが図5である。したがって、得点の真ん中の値は3.5となっている。

5つの園のプロフィールの特徴は、ほぼすべての園が生活体験重視、安全・過程重視、子ども主導、協調性・思いやり重視、男女平等というものであった。その他の園全体の平均値はこの5園の中間に位置していた。5園を比較すると次のような特徴が浮かび上がった。

A園の特徴は、安全・過程重視と同じほど冒険・成果を重視しており、協調性・思いやりと共に個性・たくましさを重視している。

B園の特徴は、生活体験を非常に重視しており、安全・過程を尊重し、子ども主導を非常に重視し、男女平等保育重視という点にある。

C園は、5園のなかで全体に中間的な特徴を示しており、安全・過程重視、協調性・思いやり重視を示し、男女平等体験というなかで男女を区別した指導をもという点に特徴がある。

表4 5園の保育特徴の尺度別平均値(SD)

園(人数)	1.生活体験重視	2.冒険・成果重視	3.教師主導	4.個性・たくましさ重視	5.男女平等
A 9	30.0 (4.69)	25.2 (4.52)	18.0 (4.42)	21.7 (4.87)	18.1 (3.22)
B 6	33.5 (2.88)	16.7 (5.05)	16.2 (3.06)	18.7 (4.55)	19.3 (1.63)
C 7	28.7 (3.73)	16.1 (2.09)	18.7 (3.15)	17.3 (5.02)	15.1 (3.85)
D 8	24.8 (3.41)	14.5 (2.39)	21.5 (1.60)	17.5 (2.07)	16.9 (2.48)
E 4	33.0 (2.94)	16.5 (2.38)	17.8 (1.50)	18.3 (1.50)	18.5 (3.00)
その他 62	30.7 (4.88)	18.6 (4.57)	18.3 (4.17)	17.9 (4.60)	18.1 (2.84)

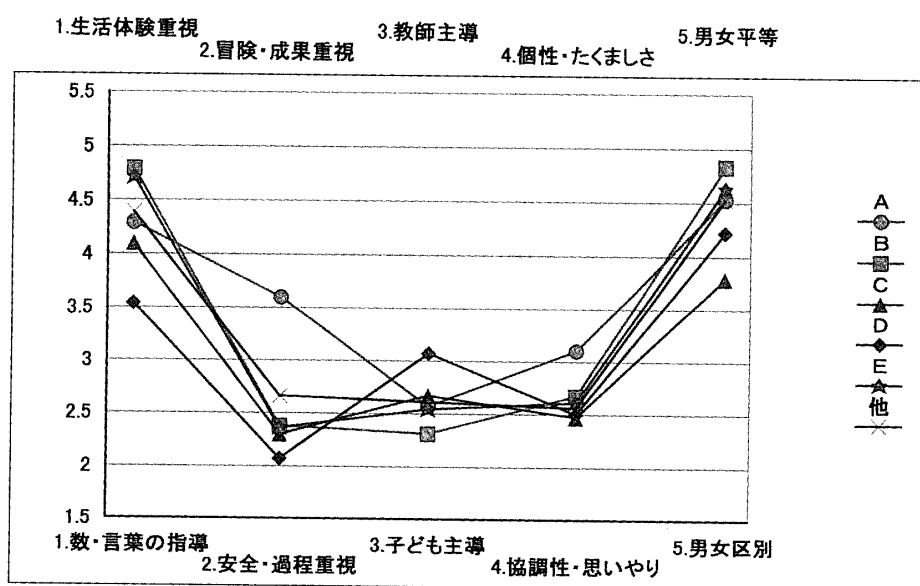


図5 5園の保育プロフィール

D園の特徴は、生活体験と同じほど数・言葉の指導を重視しており、さらに安全・過程を特に重視し、子ども主導のなかで教師主導の側面もあり、協調性・思いやりを重視している。

E園の特徴は、生活体験を非常に重視しており、安全・過程重視、協調性・思いやり重視、男女平等保育重視という特徴がある。

安全・過程、子ども主導、協調性・思いやり重視という点ではB、C、E園が共通している。

各特性について分散分析を行ったところ、第1因子の数・言葉の指導重視—生活体験重視に関して1%水準で有意差がみられた。さらにTukeyの方によって分析すると、B園とE園の得点がD園より有意に高いことが明らかとなった。つまり、B園とE園は生活体験重視に対してD園は生活体験と数・言葉の指導の両方を重視していることが分かった。

また第2因子の安全・過程重視—冒険・成果重視に関しても0.1%水準で有意差がみられた。さらに分析をすすめると、A園の得点が他の園よりも有意に高く、A園は安全・過程を大切にするというだけでなくそれと同じほど冒険・成果をも重視するということが明らかとなった。

そのほかの因子に関しては有意差がなかった。

各園における保育者の保育特徴は一致（類似）しているかどうかを明らかにするために、標準偏差（SD）に注目した。5園について比較すると、A園はすべての尺度について値が大きく、その他の園全体の値とあまりかわらなかった。このことは保育の特徴について個人差が大きいことを示している。B園の特徴は「2. 安全・過程重視」という点では個人差が大きい、「5. 男女平等」「1. 生活体験重視」という点ではきわめて一致していた。C園の特徴は「4. 協調性・思いやり重視」「5. 男女平等」という点では比較的個人差が大きい、「2. 安全・過程重視」という点では一致していた。D園の特徴は全体に保育特徴の個人差が少なく、一致しているといえる。E園の場合は人数が少ないが、D園と同じように全体として保育の特徴が一致していた。

ここで、保育特徴は一致している方がいいのか、そうでない方がいいのかという問題につきあたる。園の教育方針について共通理解は大切であり、バラバラであってはいけないだろう。他方、自由な雰囲気の中で保育者の個性が尊重されることも重要であり、固定的、画一的であってはいけないだろう。子どもの個性を育てることが重視されている現代、保育者の個性も求められている。そのあたりをどのように考えるか。何を共通理解とし、何を自由とするか。保育方針（枠組み）についての共通理解といっても幅があり、また保育方法やその細かい創意工夫、保育者の個性尊重についても、それをどのように実現していくかが園や保育者自身の課題となるだろう。

3. 5園における母親と父親の養育態度の特徴

男子に対する母親および父親の態度については有意差が認められなかった。

女子に関しては、父親の養育態度には有意差がなかったが、母親の受容と矛盾について有意差がみられた（図6～7）。いずれの園の母親も受容的であったが、Tukeyの法により園間で比較し

た結果、C園とB園との間に有意差がみられ、C園の母親の方がB園の母親よりも受容得点が高かった。矛盾についてはB園とA園との間に有意差がみられ、B園の母親の方がA園の母親よりも矛盾得点が高かった。また人数が少なくて有意差とはならなかったが、E園の矛盾得点が低かった。したがって、女子に対する母親の態度について、A園の母親は矛盾した態度が比較的少なかった。B園の母親は相対的に受容が少なく矛盾が多いという特徴があった。C園の母親は受容的であった。D園の母親の特徴は全体に平均的ということであった。E園の母親は矛盾が少ないという特徴があった。

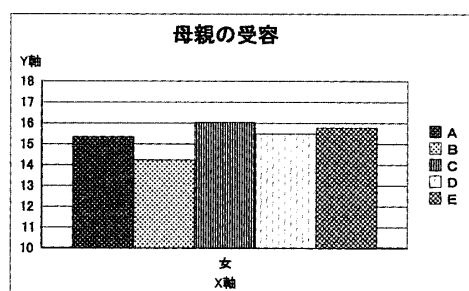


図6 母親の受容得点

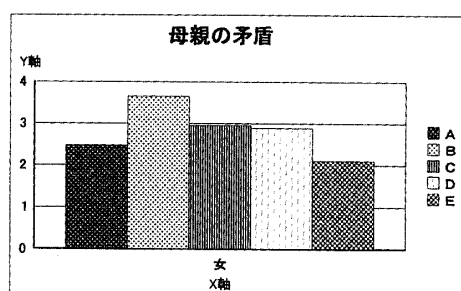


図7 母親の矛盾得点

考 察

家庭での子どもの行動特徴について園間で比較したが、大きな差異はみられなかった。他方、幼稚園や保育園での子どもの特徴は、園によって非常に異なっていた。この結果は、先の研究（森下、2002）ですでに明らかにされた、家庭と園での特徴が一致しない子どもが多いという結果と矛盾していない。担任教師による評定や母親による評定が一応妥当性の高いものと仮定すれば、幼児は場面によって異なった水準の行動特徴を示すと考えられる。

保育の特徴と子どもの行動特徴

このような園での子どもの行動特徴に影響している要因のひとつとして、園や担任教師（保育士）の教育（保育）の特徴をあげることができる。

保育特徴について信頼性が一応認められる5つの因子（尺度）を得た。因子内容を吟味すると必ずしも1因子構造になっていないように見える。一応それぞれ1. 数・言葉の指導重視—生活体験重視、2. 安全・過程重視—冒険・成果重視、3. 子ども主導—教師主導、4. 協調性・思いやり重視—個性・たくましさ重視、5. 男女区別—男女平等因子と命名した。これらの因子と梶田ほか（1985）の因子とを比較すると、この第2因子は梶田ほかの「成果重視—過程重視」、第3因子は「子ども中心—教師中心」、第4因子は「まとめ重視—個性重視」第5因子は「男女区別—男女平等」という風に内容は部分的に対応している。

保育特徴が子どもの自己制御等の形成に影響しているのではないかという視点から、各園の保育特徴と、それと同時期に測定された第2回目の子ども調査結果との関連について考察する。た

だし、子どもについて1回目と2回目の各園の調査結果はほぼ同じものであった。

(1) A園について、保育の特徴は、安全・過程重視と同じほど冒険・成果を重視しており、協調性・思いやりと共に個性・たくましさをも重視している。

男子は養護性が低いのにに対して家庭での自己主張が高かった。

女子は自己抑制と養護性が低く相対的に攻撃性が高かった。

養護性が低いという男女に共通した特徴や、自己抑制が低く攻撃性がやや高い女子の特徴は、「生き生きした強く明るい子ども」の育成を教育目標とする園の特徴や、冒険やたくましさ重視するという保育者の特徴を反映した結果かも知れない。また冒険やたくましさの重視が男子の家庭での自己主張の強さに現れている可能性がある。

(2) B園の保育の特徴は、生活体験と子ども主導を非常に重視しており、安全・過程を尊重し男女平等指導重視という点にある。

男子は自己抑制が低くて攻撃性が高かった。

女子は自己抑制がやや低く攻撃性も相対的に高かったが、養護性は高かった。

男女に共通した自己抑制の低さと攻撃性の高さは、強くたくましい子どもの育成をめざす保育目標や、教師の指導よりも生活体験や子ども主導を非常に重視した保育特徴が子どもの活動性を高めることを反映しているかも知れない。また女子の養護性の高さは、保育園という場のなかで過去と現在におけるより大きな子どもやより小さな子どもとの交流経験の豊かさがプラスに働いた結果だと考えられる。

(3) C園の保育の特徴は5園のなかで全体に中間的で、安全・過程重視、協調性・思いやり重視の中で、男女平等体験と共に男女を区別した指導をもという点が特徴である。

男子は園での自己抑制と養護性が高く攻撃性が低かった。

女子は自己抑制と養護性が高く攻撃性が非常に低かった。

男女に共通した自己抑制や養護性の高さと攻撃性の低さは、「かがやく生命、やさしい心」を大切にする教育目標や、安全・過程重視、協調性・思いやり重視の保育特徴が影響している可能性がある。男女を区別した体験や保育方針をも取り入れるという特徴が男女にどのような影響を与えているかについては、女子の攻撃性の非常な低さに反映されているかも知れない。

(4) D園の保育の特徴は、生活体験と同じほど数・言葉の指導を重視しており、さらに子ども主導のなかで教師主導をも大事にし、安全・過程や協調性・思いやりを重視している点である。

男子は自己抑制と養護性が高いのにに対して攻撃性が非常に低く、家庭での自己主張は高かった。

女子は自己抑制が高く、攻撃性が非常に低かった。

男女に共通した自己抑制の高さと攻撃性の非常な低さ、男子の養護性の高さは、「生命を大切に、感謝の心を忘れない」ことを大切にする教育目標や、安全・過程重視、協調性・思いやり重視、教師主導を比較的重視する保育特徴を反映しているかも知れない。数・言葉の指導を比較的重視する保育が子どもにどのような影響を与えているかはこの研究の限り不明である。

(5) E園の保育の特徴は、生活体験を非常に重視しており、安全・過程重視、協調性・思いやり重視で、男女平等指導重視という点にある。

男子は自己抑制が低くて攻撃性が高く、家庭での自己主張は低かった。

女子は自己抑制と養護性が共に高かった。

女子の自己抑制の高さと養護性の高さには「やさしい信条、仲間とともに」を大切にする教育目標や、協調性・思いやり重視の保育特徴の影響があるかも知れない。自己抑制が低く攻撃性が高いという男子の特徴には何が関与しているか不明である。

以上、各園の教育（保育）目標や保育特徴と子どもの特徴との関連について考察してきたが、さらに各園の歴史的文化的背景の影響が考えられる。例えば、C園とD園の子どもたちは共通して自己抑制と養護性が高く攻撃性が低かったが、そこには仏教という共通の背景が作用しているかもしれない。

親の態度の影響

男子に対する態度は、母親に関しても父親に関しても園間には有意差がなかった。地域性が異なっているが、男子に対する母親および父親の養育態度には差異がないと考えられる。それに対する家庭での子どもの特徴は、男子では自己主張について有意差がみられ、A園とD園の子どもは自己主張が高く、E園の子どもは自己主張が低かった。男子の家庭での自己主張の違いを説明できる親の態度要因は見出されなかった。

女子に対する父親の態度には有意差がなかったが、母親の態度には次のような特徴があった。A園の母親は矛盾した態度が比較的少なかった。B園の母親は相対的に受容が少なく矛盾が多いという特徴があった。C園の母親は受容的であった。D園の母親は全体に平均的な態度ということであった。E園の母親は矛盾が少ないという特徴があった。母親についてのこのような差異は、地域環境や生活環境が影響しているものと考えられる。これに対して、家庭での女子の特徴には有意差がみられなかった。

B園女子の特徴の内、園において比較的自己抑制が低く攻撃性が高いという特徴には、母親が比較的受容が少なく、矛盾が多いという態度が影響しているかも知れない。またC園女子の園における特徴（自己抑制と養護性が高く、攻撃性が非常に低い）には、母親の受容的な態度が影響している可能性がある。さらに、E園女子の園における特徴（養護性が高く、攻撃性が非常に低い）には、母親の態度の矛盾の少なさが関与しているかも知れない。

残された課題

本研究で用いられた梶田ほか（1985）の保育特徴に関する質問紙は、項目内容がよく吟味されたものである。項目を対にして呈示し、どちらかを選択させて保育の重点の置き所をより浮かび上がらせようとしている点に特徴がある。しかし、そこに長所と共にいくつかの問題点がある。

その一つはそれらの項目がはたして対になるような保育特徴であるのか、あるいは互いに両立しがたい保育であるのかということである。例えば、個性と協調性、思いやりとたくましさは対

立するものかどうか。仮に思いやりの育成とたくましさの育成の両方を保育目標とする場合を考えると、両方が独立に測定できるような尺度が必要となる。したがって、対になった項目を全部ばらして、一つひとつの項目への評定を求めるという方がベターかも知れない。そうすることによって、より因子構造や因子間の関連が明確になり、きめ細かな尺度となるだろう。

また対として呈示された項目は互いに意味を限定したり特徴づけたりするから、同じ項目でも単独に呈示された項目と意味が同じものだということにはならない。したがって、この尺度を使って保育特徴を理解する場合、対立概念としての保育特徴という限定が常につきまとう。

本研究の問題点のひとつとして、保育特徴に関する分析結果は因子の信頼性があまり高いものではなく不安定なものであったという点があげられる。このことについては上のことが関係しているかも知れないが、より広く多くのデータを集めさらに分析をすすめる必要がある。

さらに、園における子どもの特徴の評定は妥当性の高いものかどうかという点である。すでに先の研究(森下、2000b)で明らかにされたように、同じ子どもについて担任の評定と隣のクラスの担任の評定との相関は有意ではあるが必ずしも高い値を示さなかった。ただここで評定間の不一致という点では片づかない問題が残される。つまり必ずしも高くない評定一致率は、同じ子どもの異なった行動場面の観察に基づいているかも知れないし、同じ子どもが保育者によって異なった人間関係を結んでいる、そのことを反映しているかも知れない。

また保育特徴に反映されているような担任や園全体の期待が、子どもを評定する際に働いている可能性もある。そのこととも関連するが保育特徴を評定した者と子どもの特徴を評定した者は同一の評定者だということも方法論上問題となる。このような場合、反応セットをはじめ種々の問題が作用する可能性がすでに指摘されている(小嶋、1979)。このような方法論上の問題点を改善するためには第3者による評定が必要となるだろう。

最後に、保育が子どもの自己制御機能等の発達にどのような影響を与え得るかという視点からデータを解釈してきたが、そのことを実証できたわけではない。これを実証するためには、入園当初から子どもの観察を通じて、保育者の働きかけと子どもの行動の変化との関連をきめ細かく分析する必要があるだろう。

家族構成や家族関係をはじめとする家庭の特徴、幼稚園・保育園の歴史的文化的特徴、それを取りまく地域の社会的文化的特徴、そのようなメゾシステムが子どもの行動を特徴づけているだろう。このような生態学的な要因や要因間の関連を総合的に分析するという課題が残る。

要 約

本研究の目的は、幼稚園や保育園における保育特徴や親の養育態度が、子どもの自己制御などの行動特徴にどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。

研究の対象となったのは5つの幼稚園・保育園の年中児(4歳児)と年長児(5歳児)合わせ

て531名であった。園と家庭での子どもの特徴についてはそれぞれ担任と母親に評定を求めた。また保育特徴については担任に、養育態度については母親と父親に評定を求めた。それらの関連について、5つの園を軸に比較分析した。

その結果、家庭での子どもの行動特徴については5園の間でほとんど差異がみられなかった。しかし、園での子どもの行動特徴には園によって大きな違いがあった。また各園の保育特徴にも大きな差異がみられた。両者の関連を検討すると、保育特徴が園での子どもの行動特徴に影響している可能性が示唆された。つまり、安全・過程、協調性・思いやりを重視した保育特徴をもつ園の場合、子どもは男女共に自己抑制や養護性が高く、攻撃性が低かった。それに対して、冒険やたくましさを重視する園や、生活体験や子ども主導を非常に重視する園では、子どもは比較的自己抑制が低く攻撃性が高かった。ただし、それだけで冒険やたくましさ、生活体験や子ども主導を重視する保育を問題視しないで、むしろその良さを活かしながらカバーする方法を考える必要があるだろう。

母親と父親の養育態度については、若干の例外を除き園間で大きな相違点はなかった。

今後の課題として、保育特徴の測定の問題、第3者による子どもの行動の観察の問題、生態学的要因についての細かいデータの収集と総合的な分析の問題が残された。

(付記) 本研究を進めるに当たり、5つの幼稚園・保育園の園児の皆さん、園長先生、先生方、保護者の方のご協力を得ました。ここから感謝いたします。

引用文献

- Bronfenbrenner, U. 1979 *The Ecology of Human Development - Experiment by Nature and Design*
(磯貝芳郎・福富 護 訳 1996 人間発達の生態学 川島書店)
- 梶田正巳・後藤宗理・吉田直子 1985 保育者の「個人レベルの指導論 (PPT)」の研究ー幼稚園と保育園の特徴ー 名古屋大学教育学部紀要ー教育心理学科ー、**32**, 173-200.
- 小嶋秀夫 1979 親子関係の心理 (二)ー親子関係の意義の研究ー 児童心理, **33**, 1126-1143.
- 小嶋秀夫編著 1999 人間発達と心理学 金子書房
- 森下正康 2000a 幼児期の自己制御機能の発達(1)ー思いやり、攻撃性、親子関係との関連ー 和歌山大学教育学部紀要 (教育科学)、**50**, 9-24.
- 森下正康 2000b 幼児期の自己制御機能の発達(2)ー親子関係と幼稚園での子どもの特徴ー 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、**10**, 117-128.
- 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達(3)ー父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるかー 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、**11**, 87-100.
- 森下正康 2002a 幼児期の自己制御機能の発達(4)ー園と家庭における縦断的研究ー 和歌山大学教育学部紀要 (教育科学)、**52**, 1-12..
- 森下正康 2002b 幼児期の自己制御機能の発達(5)ー親子関係が家庭と園での子どもの行動パターンにおよぼす影響ー 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、**12**, 47-62.